

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	松田 凌
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院心理学研究科博士後期課程 修了	博士 (心理学)	臨床心理学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

他者の幸せを願い、自己の倖せをかなえる人材の育成

【目標】

社会問題の一つであるメンタルヘルスに係る諸問題の予防・解決に取り組める「真に信頼して事を任せうる人格」を有する人材を育成する。

【方針】

心理学分野の多彩な知見を提供し、自律的に問題意識をもち考える機会を提供することで、社会や日常生活で起こり得る困難へ対処する力を身につけることをサポートする。

【計画（方法）】

心理学分野の様々な授業を通して、メンタルヘルスに係る問題へ積極的に関心を向け、その解決を担えるよう人材の育成を行う。具体的には、講義を通じた正しい知識の提供と、実践を見据えた演習時間を両立させることで、知識・スキルともに身に付け社会に役立つ人材を輩出する。また学外実習を通じて、心理支援職の実践について体験的に学んでもらうことで、専門職として活躍できる人材を育成する。

【担当科目】

（前期）

教育相談（中・高）、障害者・障害児心理学、心理実習、人間健康学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ、福祉心理学

（後期）

感情・人格心理学、産業・組織心理学、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ、卒業研究

○教育方法の実践

講義系の授業では、毎回の授業で穴抜き資料を配布し、小テストを課すことで、受講生が主体的に講義内容と向き合うような仕組みを取り入れた。また講義資料（PDF）を配布することで、講義内容の復習に取り組めるような仕組みづくりを工夫した。授業欠席者には、配布した講義資料を参照しつつレポートに取り組んでもらうことで、欠席時のフォローを行った。加えて、平常点が低い学生は特別レポートの提出、最終成績が単位認定に届かなかった学生は再試験の受験が可能な体制を整え、一人でも多く単位認定の基準を上回るよう心掛けた。

演習系の授業では、心理コース全体で協力しつつ、グループワークや発表の機会を増やし、卒業後に求められる社会的スキルが身に付くよう工夫した。また4年時の専門演習では、個人の主体性を大事にしつつ研究テーマを決定させ、本人が意欲的に取り組めるような研究をサポートした。

○作成した教科書・教材

特にありません。

○自己評価

概ね計画した通りに教育活動を進めることができた。一方で、講義系科目の単位取得率が低い結果となってしまったことから、より学習意欲を高め、内容理解を促せるような講義を提供できるよう次年度に臨みたい。また就職活動や大学院受験など、キャリアに関わるサポートが十分に行えなかった点も課題として挙げられることから、可能な範囲で学生のサポートに尽力したい。

II 研究活動

○研究課題

ロールシャッハ法及び描画法といった、心理臨床の実践で使用されているアセスメントツールの信頼性・妥当性を検証する。また各ツールの効果的なフィードバックの方法について検討する。

○目標・計画

【目標】

上記の課題を目的とした研究報告を行う。大学生を対象とした基礎研究や、臨床現場で得たデータを用いた応用研究など、使用可能な環境は最大限活用しつつ、広範なアプローチから検討、報告を行えるよう尽力する。

【計画】

ロールシャッハ法については、反応産出過程の認知心理学的理解を目指した研究を計画しており、研究資金が獲得できれば実施する。また医療機関と連携し、精神疾患を抱える方のロールシャッハ法、描画法のデータを共有してもらっているため、研究としてまとめ学会及び論文にて報告する。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・ 松田凌（2023）「人さまざま」な私たちが抱える心理的課題とその支援 人間健康学 第 17 章 (p189-199)

（学術論文）

- ・ 松田凌・北村隼大・津端亮介（印刷中）もの忘れ外来受診者の認知的・心理的機能と介護負担 認知神経科学
- ・ 明翫光宜・高柳伸哉・鈴木勝昭・鈴木康之・伊藤大幸・村山恭朗・山根康宏・小倉正義・水間宗幸・白石雅一・望月直人・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・高田晃治・松田凌・曾我部哲也・辻井正次（2023）無料低額宿泊所入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査 臨床精神医学 52(10), 1235-1245
- ・ 松田凌・安野奏（2023）衛生マスクと髭が顔の魅力に与える影響 東邦学誌 52(1), 9-17
- ・ 馬場史津・松田凌（2022）描画テストの解釈過程—解釈の基礎と所見— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 21(1), 37-43
- ・ 松田凌（2021）ロールシャッハ法に現れる注意制御の困難さ—不快刺激へ注意が向きやすい 1 事例からの検討— 中京大学臨床心理相談室紀要 21, 15-27
- ・ 松田凌（2021）高 ASD 傾向者のロールシャッハ反応—視覚的注意の機能に着目して— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 20(1), 43-54
- ・ Matsuda, R. (2019) Multiple emotion regulation in Rorschach color responses: A study using IAT and self-report., Rorschachiana 40(2), 112-130

- ・松田凌（2018）ロールシャッハ・テストの色彩反応と情動刺激によるストループ干渉の関連 ロールシャッハ法研究 22, 42-53
 - ・松田凌（2018）無気力を訴える高校生との面接過程に関する考察—心理検査の活用に焦点を当てて— 中京大学臨床心理相談室紀要 18, 1-8
 - ・松田凌・馬場史津（2017）ロールシャッハ反応産出過程における認知的制御の役割—情動ストループ課題を用いた検討— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 17(1), 53-61
- （学会発表）
- ・松田凌（2023）未来は“若手”の手の中？ 若手シンポジウム「投映法研究の予想図—これからの100年に向けた若手研究者の声—」日本ロールシャッハ学会第27回大会
 - ・松田凌（2023）高ASD傾向者のロールシャッハ反応—片口法とR-PASの比較から— 日本ロールシャッハ学会第27回大会
 - ・松田凌・馬場史津（2022）描き慣れた「木」に現れるもの、表れないもの—「本当の自分」を知りたい教師の事例から— 日本描画テスト・描画療法学会 第31回大会
 - ・Matsuda, R. (2021) The effect of negative attentional bias on the Rorschach response process. 2021 Virtual SPA Convention, Poster, Pre-recorded sessions,
 - ・松田凌（2020）再評価と抑制が反応産出に与える影響—情緒的な反応内容に着目して— 日本ロールシャッハ学会第24回大会
 - ・松田凌（2018）損傷反応（MOR）と情報処理バイアスとの関連 日本ロールシャッハ学会第22回大会
 - ・松田凌（2017）色彩反応と感情制御の方略および潜在的選好との関連 日本ロールシャッハ学会第21回大会
 - ・松田凌（2016）色彩反応と情緒刺激に対する注意の制御—情動ストループ課題を用いた検討— 日本ロールシャッハ学会第20回大会

（特許）

特にありません。

（その他）

特にありません。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

次年度の科学研究費補助金へ申請したが、不採択であった。

○所属学会

日本心理臨床学会, 日本ロールシャッハ学会, 日本心理学会, Society for Personality Assessment, 日本描画テスト・描画療法学会, 認知神経科学学会

○自己評価

学会誌への論文が受理されたことを始め、学会発表やシンポジストとしての登壇など、前年度よりも研究活動にエフォートを割くことができた。また学内外の研究者と共同研究の計画を立てるなど、次年度予定されている国内外での学会発表に向けて準備を進めることができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

「真に信頼して事を任せうる人格」となる可能性を秘めた人材をより多く入学させるため、入試委

員会として広報や選抜の業務に注力する。また中退防止 WG の担当として、本学部学生の中退者数の減少へ寄与する活動に取り組む。

【計画】

専門職として心理支援に携わっている経験を活かし、大学生活に困難をきたしている学生にきめ細やかな支援を提供する。

○学内委員等

入試委員会として、本学で実施される入試業務の運営や入試問題の作問、大学共通テストの試験監督などの業務に従事した。また学部内では中退防止 WG として活動を行い、中退が懸念される学生の共有や支援をサポートした。

○自己評価

初めて担当する委員会ということもあり、入試日程や入試区分、業務内容を理解することに追われ、他の委員会メンバーからお力添えをいただき続けた 1 年であった。次年度も継続して同委員会へ所属する予定であることから、委員会に迷惑をかけぬよう努めたい。また中退防止の業務も継続することが決まったことから、この 1 年で培った経験や実感された改善点を持って、次年度に臨みたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

精神疾患への罹患をはじめ、メンタルヘルスの問題を抱える方が生きやすい社会の実現を目指す。

【計画】

臨床心理学的支援に関する研究を報告することで、心理支援職あるいはメンタルヘルスの問題を抱える方に役立つ知見を提供する。また心理支援職として医療機関に勤務することで、精神疾患を患う方の直接的な心理支援の役割を担う。

○学会活動等

日本ロールシャッハ学会第 27 回大会にて、大会実行委員の一員として大会運営に携わった。また同大会においてシンポジストとして登壇し、昨今のロールシャッハ研究の動向や、当領域が抱える課題について発表することで、若手研究者の研究活動を促すことに貢献できたと考えられる。

○地域連携・社会貢献等

精神科クリニックで心理支援職として職務を全うし、メンタルヘルスの問題を抱える人へ支援を提供した。また高校生向けの出張授業や、専門学校で非常勤講師として授業を行う際に、心理支援職の業務を具体的に紹介することで、国民の健康を支える専門職への関心を高めるよう努めた。

○自己評価

学会の大会運営・準備に携わる、高校生・学部生に向け心理専門職の魅力を発信するといった形で、臨床心理学という学問領域に寄与した。また医療現場に心理専門職の立場から携わることで、支援を要する人を援助し、加えてその経験を教育活動に活かすことができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自身の臨床技術を高めるため、そして修得した知識や技術を教育に還元するために、専門学会や研修会・研究会等へ積極的に参加した。

VI 総括

2 年目ということもあり，前年度に比べてゆとりを持って教育・研究に携わることができた。演習系の授業に関しては成員の個性に合わせて教育を提供する必要がある，より柔軟な対応が求められることを痛感した。次年度からも，新たに担当する顔ぶれを十分に観察しつつ，丁寧な個別指導を行えるよう努める。また講義系の授業に関しては，出席確認や成績評価といった授業運営の方法に手応えを感じたことから，次年度以降も同様に丁寧な講義とサポートを提供できるよう心がけようと思う。

以 上